LIAR GAME -PARALLEL-

魅影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＬＩＡＲ　ＧＡＭＥ　－ＰＡＲＡＬＬＥＬ－

【Ｎコード】

Ｎ６９１５Ｓ

【作者名】

魅影

【あらすじ】

天才高校生・高雅と、高雅を上回る頭脳を持つ同級生・竜威。対極的な性格の２人のもとへ届く謎の小包。その中身は１億円だった…。

「ライアーゲーム」、つまり「嘘つきゲーム」に参加することになった２人を待つものとは…

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ「二人」（前書き）

これまで1年2カ月の月日をかけてＧＡＮＴＺ－Ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ－を書いてきましたが、
ついに完結いたしましたので、新作を書いていこうと思います。
といってもまた二次創作なわけですが（笑
ＧＡＮＴＺに続いてまたヤンジャンの漫画が原作です。
出来る限り自作のゲームを入れていこうと思いますが
どうしてもネタが浮かばない時は原作でもあったゲームを使いたいと思います。
また完結まで長くなると思いますが、読者の方、よろしくお願いします。

一度書いた長文がエラーで消えてしまい、意欲喪失後、
再開しようかと思うものの、自分は高校2年生でありまして、
勉強と部活でかなり忙しく書く暇がなく、
長期間更新できていませんでした。
無責任をお許しください。
これから暇を見つけながら更新していきます。
まずは以前書いた序盤の文章を改正していきます。
よろしくお願いします。

Prologue「二人」

高雅「言え！！お前、なんでこんなことを！！？」

竜威「………」

高雅「言え！！！」

———雷の鳴る夜だ…。

LIAR GAME —PARALLEL—

８か月前―――

「人間は、欲望には勝てない生き物だ…」

教師が国語の授業の中でそう言った。

教師「この小説には、そういう人間の弱さ、汚さへの批判が込められているのです」

1人、生徒が挙手した。

教師「みなさんは作者の意見に賛成ですか？反対ですか？」

1人の少年が挙手した。

彼の名は、天海竜威（あまみりゅうせい）。
県内学力トップの高校の2年生。
しかも学年トップを独占する超優等生だ。
多くの友人からも絶大な信頼を得ている。

竜威「人間は欲望に勝てない…ということに反対です」

教師「なぜですか？」

竜威「僕自身がそうでない自信があるんです。
僕は困っている人が居れば、自分が犠牲になろうとも、その人を助けます」

授業が終わり、休み時間を迎えた。

竜威の隣のクラスでは、生徒たちがガヤガヤと雑談をしている中、
1人席に着いたまま窓から外を眺めている少年の姿があった。

彼は、竜威に次ぐ、学年2位の藤原高雅（ふじわらこうが）。
2位である高雅は当然1位の竜威に対してライバル心を抱いている。
彼は非常に冷たい人物だった。
本当は正義強さを備えているのだが、冷たさの方が際立ってしまって、
彼と親しい者はほとんどいなかった。

そんな彼らの下に、影が忍び寄るのであった。

1．扉

竜威は友人２人と学校から帰宅途中だった。

竜威「じゃあなァ」

友人Ａ「じゃあな」

友人Ｂ「バイバイ」

竜威は２人と別れ、自転車のハンドルを操作し、
Ｔ字路を左折した。

竜威が自転車のペダルを漕いでいると、
突如、竜威の目の前に黒服の男が飛び出してきた。

竜威「あっ！！」

とっさにブレーキをかけ、目をつぶる。

……間一髪、衝突は免れた。

ぶつかりかけた相手をもう一度よく確認しようと、
竜威は目を開けた。

相手は、背広に身を包み、サングラスとマスクを顔に装着している。

おかげで顔はまったく確認できない。

そしてその男の脇には黒い小包が抱えられていた。

黒服「アマミリュウセイ様、お待ちしておりました」

竜威「はぁ？」

男は１枚のカードを竜威に手渡した。

黒く、笑う天使の描かれたカードだった。
そこには文章が…

「天海竜威さま　おめでとうございます　あなたはこのたび１０万分の１の確率をくぐりぬけ見事ＬＩＡＲ　ＧＡＭＥ　ＴＯＵＲＮＡＭＥＮＴにＥＮＴＲＹされました」

竜威「は？あなた誰ですか？いたずら？」

黒服「私はＬＧＴ事務局の局員・オカダです。アマミ様、これは決していたずらではありません」

竜威「…ライアーゲーム……、嘘つきゲーム？？」

オカダ「はい。簡単に言いますと、プレイヤーが騙し合い、事務局が貸し付けた巨額のマネーを奪い合う…という戦いです」

竜威「馬鹿馬鹿しい。…巨額の…って…、いくらだよ」

オカダ「参加承諾を頂けた場合にしかお教えすることができません」

竜威「あっそ。じゃあいいや。参加しない」

オカダ「よろしいのですか？？このゲームのシステムを一言で言いますと、
誰かが儲ければ誰かが損をするものです。
勝てば莫大な賞金。負ければ莫大な負債」

竜威「負債……？そうなったら…どうなる…？」

オカダ「別にどうもないですよ…。
ただ、先ほども言いましたが、プレイヤーが奪い合うのは、事務局の貸し出すマネーです。
きっちり返していただきます。どんな手を使ってでも」

竜威「嫌だね。絶対嫌だ。参加しない」

オカダ「はぁ…、非常に惜しいですね。
このゲームには大人も大勢エントリーされているわけですが、
あなたはまだ高校生です。しかし、あなたはとても高い能力をお持ちです。
参加すれば優勝候補の１人になるでしょう」

竜威「参加しない」

オカダ「良いのですか？あなたは知力が高いだけでなく、強い正義感を持っている。
あなたなら、負債におびえる弱者たちを救えるかもしれない！」

竜威「弱者を…救う…？」

オカダ「…はい」

竜威「……その小包に金が？」

オカダ「はい」

竜威「見せて下さい」

オカダは一瞬驚きの表情を浮かべた後、マスクの中で笑みを浮かべた。

オカダ「参加するのですね？あなたならそうされると思ってました。優しいあなたですから…」

小包が開けられた…

高雅は、1人でポケットに両手を突っ込んだまま、歩いて下校中だった。

高雅「眠…」

と、高雅の前に黒服の男が出現した。

高雅は怪しんで男をチラッと見たが、無視してその横を通り過ぎようとした。

しかし、男は高雅の左腕を掴んできた。

高雅「は？」

黒服「フジワラコウガ様、お待ちしておりました」

高雅「誰？」

黒服「申し遅れました。私はLGT事務局の局員、フルタニです」

高雅「LGT？？」

フルタニ「はい。LIAR GAME TOURNAMENTのことです。
あなたはこのたび、そのトーナメントにエントリーされたのです。
参加するかしないかは、フジワラ様次第でございます」

高雅「ライアーゲーム…？ライアー？嘘つき？」

フルタニ「そうです。ライアーゲームとはつまり嘘つきゲーム…騙し合いです」

高雅「騙して何になんの？」

フルタニ「事務局の貸したマネーをプレイヤー同士で騙し合って奪い合うのです。
勝者には巨額の賞金が与えられるのですよ」

高雅「敗者は？」

フルタニ「フフフ…巨額の負債を背負うことになります」

高雅「負債…ねぇ……。へぇー…、馬鹿馬鹿しい」

フルタニ「アマミリュウセイ様が参加表明しております」

高雅「…天海？？」

竜威は、高雅が通う高校で、唯一高雅の上をゆく成績を誇る人物だった。

高雅の中には、竜威に対する敵対心が存在していた。

フルタニ「どうなされますか？興味がおありのようですが」

高雅「負債を背負ったらどうなる」

フルタニ「借金を背負ってでも、何をしてでも、マネー返却してもらいますよ。
借りたものを返すのは常識でしょう？」

高雅「………参加…する…」

フルタニ「ありがとうございます。あなたは高い能力をお持ちです。
おそらく優勝候補の1人となるでしょう。
では、1回戦に使用するマネーをこの場でお渡しします」

フルタニが黒い小包を渡してきた。

フルタニ「それと、このカード…」

フルタニが、文章と地図が載せられた黒いカードを渡してきた。

1回戦会場の周辺地図と、集合時刻について記されたものだった。

フルタニ「では、またお会いしましょう」

フルタニは姿をくらました。

高雅は小包を自宅に持ち込み、自分の部屋で開封してみた。

そして、高雅の視界に飛び込んできたのは、札束。札束。札束。札束。札束。札束…

その額……

1億円。

2. GAME ？

そして、ゲーム当日。

事務局員に渡された地図によって高雅が導かれたのは、とある喫茶店の跡地だった。

事務局員Ａ「ようこそお越し下さいましたフジワラ様。どうぞこちらのテーブルでお掛けになってお待ちください。対戦相手となるプレイヤーが間もなく到着しますので、それからゲームの内容をご説明します」

高雅「はい」

数分後、１人の男が、事務局員により高雅の座っているテーブルまで案内されてきた。

事務局員Ａ「プレイヤーが揃いましたので、ルール説明に入ります…」

カウンターの奥から、他の事務局員とは違う、装飾の施された仮面の男が現れた。

仮面の男「こんにちは、フジワラ様、イトウ様。私、このゲームのディーラーを務めさせていただく、リディルと申します。では早速、ゲームの説明に参りましょう。

今回お二人にやっていただくゲーム…それは、『ジョーカーゲーム』」

イトウ「ジョーカー…ゲーム…？」

リディル「はい。お二人とも、『ババ抜き』はご存じでしょう？
あれに特別なルールを付け加えたものです。
まず、私が各マーク１３枚ずつの５２枚＋ジョーカー１枚の計５３枚のトランプをシャッフルします。
その後、私の意図が介したとされないよう、“カット”を入れます」

イトウ「カット？」

リディル「上から何枚というプレイヤーの指示で、その枚数だけ山の上から取り、下と入れ替えるのです」

イトウ「なるほど」

リディル「カットが終了しましたら、カード配布です。
その後、本来ババ抜きを開始するに当たって、
まず配られたカードの中でペアが出来ているものを捨てていきますよね？
しかし、『ジョーカーゲーム』におきましては、
この時出来ているペアのうち、３つのペアを選び、手札に残さなければなりません
これがババ抜きと決定的に違う１つ目の点。
　両者が手札を作り終えたら、サイコロで先攻後攻を決めます。
サイコロを３度振り、先に２回偶数が出ればフジワラ様が先攻、先に２回奇数が出ればイトウ様が先攻です。

それからいよいよゲーム開始です。ここでババ抜きとの違いその2。
カードを引かれる側のプレイヤーは、自分の手札を、
自分自身でも表が見えないようにしてシャッフルし、
テーブルの上に伏せて置いた状態からカードを引かれます。」

イトウ「ちゃんと自分の手札を記憶してないとなんのカードが引かれたのかもわからないってことか？」

リディル「そして、相手からカードを引いた後、ペアが1つも手札に作れなかった時を除いては
必ず手札から1つペアを捨てて下さい。これはゲームの膠着を防ぐためです。あとはババ抜き通り。
ジョーカー以外のカードが捨てられた時点でゲームセット。
ゲーム終了時点でジョーカーを所有しているプレイヤーの負け。
負けたプレイヤーは、本日持参していただいた1億円を全額勝者へ渡します。
その後、各プレイヤーから、最初にお貸しした1億円を返却していただいて、
解散となります」

高雅「勝ったら1億か…」

リディル「クックック…。さすが、強気ですね、フジワラ様。
大抵の人間は負けた時の1億の負債のことをまず考えます。
まず勝った時のことを考えたのは自信の表れですね？…クックック…」

イトウ「………」

リディル「以上からゲームの流れをまとめます」

シャッフル↓カット↓配布↓手札作成↓先攻後攻決定↓開始↓終了↓マネー移動

※手札作成の際、３つのペアを手札に残す。

※カードを引かれる時は、自分の手札をシャッフルし、テーブルに伏せた状態から引かれる。

※カードを引いた後、ペアが１つでもあれば、必ず１つのペアを捨てる。

リディル「質問はございますか？」

イトウ「…………」

高雅「…………」

リディル「まあ、実際やってみた方がわかりやすいでしょうし、新たに疑問がわくかもしれませんので、模擬ゲームを行いましょう」

３．攻略

リディル「模擬ゲームは各プレイヤー３ターンずつ行います。では、まずカードをシャッフル」

リディルが、箱から取り出した新品のデッキを素早くシャッフルし始めた。

しばらくシャッフルが行われた後、

リディル「ではカットの枚数を…」

高雅「８枚」

イトウ「１０枚」

カットが行われ、いよいよリディルがカードを配り始めた。

やがて、配布終了。

リディル「では、しばらく手札作成の時間を取りますので、どうぞ」

イトウの手札は、３、４、５、７が各１枚と、Ａ、９、Ｑが各２枚の計１０枚となった。

つまり、フジワラの手札は、３、４、５、７が各１枚と、各２枚の組が３つと、Ｊｏｋｅｒということになる。

リディル「両者手札が作れたようですので、続いてサイコロを振り、先攻後攻を決定いたします」

リディルがサイコロを振った。

1回目、3
2回目、4
3回目、1

リディル「奇数が2回でましたので、イトウ様先攻…つまり、イトウ様が先にフジワラ様からカードを引くことになります。
では、フジワラ様、手札をシャッフルし、テーブルに伏せてください」

フジワラ「はい」

フジワラが自分の手札をシャッフルし始めた。

イトウ<こいつ器用だな…。めちゃめちゃシャッフル速いじゃん…>

その通りであった。

高雅は手先が非常に器用で、シャッフルはもちろん、カードを使った手品などもお手の物だった。

しばらくしてシャッフルが終わり、カードが机上に並べられた。

カードを1枚選び、引く…

J。

リディル「イトウ様、ルール通り、ここでペアを1つ必ずお捨てください」

9のペアを捨てた。

これで手札は、3、4、5、7、J各1枚とA、Q各2枚。

リディル「攻守交替です」

続いてイトウが手札をシャッフルする。

イトウ<なるほど。このゲームはカードを持ち上げたり、シャッフルしたりという動作が多いから、相手にカードを見せてしまうミスが起こるリスクが高まるな…>

フジワラがカードを引く。

イトウの手札から無くなっていたのは、Qだった。

リディル「これで両者1ターン終了。この手順でゲームが進んでいきます」

2ターン目——

イトウが引いたカードは、5。

５のペアを捨て、手札は、３、４、７、Ｊ、Ｑ各１枚とＡ２枚。

続いてイトウが引かれたカードは、３。

そして、３ターン目───

フジワラがシャッフルを終え、カードをテーブルに伏せる瞬間だった。

イトウから見て１番右に置かれたカードの表面（おもて）の角の部分が一瞬ちらりと見えたのは…。

イトウは、そのカードを引いた。

…Ｑ。

イトウ＜そういうことか……＞

最後にフジワラがイトウのＡを引いて模擬ゲームはそこで終了。

リディル「どうでしょう。感じは掴んでいただけたでしょうか。
…私から１つだけアドバイスを…。このゲームで重要なのは、“手札作成”。
『最初にどんな３つのペアを残すか』…これで勝敗が決まるといっても過言ではありません。
　…では数分後、本番を開始いたします。準備が整うまでの間、少々くつろいでお待ちになってください」

リディルが歩み去っていった。

イトウ＜リディルの言うとおり…。このゲームは、ペアの残し方が
重要…。
見つけた…。このゲームの攻略法…＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6915s/

LIAR GAME -PARALLEL-

2011年12月13日02時07分発行